広島

豆菓子老舗 絶えず革新

福山の徳永製菓

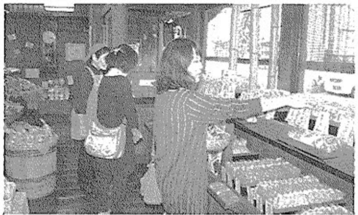
チョコ・プリン味… デザート感覚

ブドウ、チョコレート豆腐味――。豆菓子の概念を翻し、売り上げを伸ばしているのが徳永製菓（広島県福山市）だ。創業1869年。歴史を持つ老舗だが、「看板」に頼らず改革、ものづくりへの転換で右肩上がりを維持している。直販店舗を構え10年、常に新製品作りに取り組み店頭に並ぶ製品は80品以上。味に加え品ぞろえが新たな顧客層を生む。

売上高3倍に

「梅干し味、おいしいよ」。「あんころもうまい」。若いカップルが店内で試食しながら商品選びに夢中になっている。福山市にある徳永製菓の販売店には、豆菓子には縁がなさそうな顧客が足を運ぶ。おつまみではなく、デザート感覚で味わえる豆菓子。広報宣伝はほぼ皆無だが、口コミで観光客やネット販売に火が付いた。

本業の豆菓子の売上高は10年前に比べ、約3倍の4億円、そのうち約4000万円をネット販売が占める。



直営店には80品以上の様々な味の豆菓子が並ぶ（広島県福山市）

「豆徳（まめとく）」が徳永製菓の愛称だ。創業以来、豆・雑穀類を取り扱ってきた。昭和初期から業容を拡大し、食パンや菓子の卸売りなども手掛けてきた。ところが、スーパーやコンビニエンスストアの台頭で、価格競争に苦戦。事業を集約、2005年秋に福山市内に工場、店舗（豆徳本店）を構えた。

「顧客の満足する顔や声が聞きたかった」。豆徳本店の店長を兼務する徳永製菓の徳永ひろみ副社長は話す。夫で先代の社長だった故・徳永隆茂氏が、イカスミスパゲティをヒントに豆を包む生地に竹炭の微粉末を混ぜ込む「竹炭豆」を02年に開発、販売した実績もある。「製造業の原点に戻った」（徳永副社長）。

職人技で毎月新商品

大手菓子メーカーにおされ豆菓子製造は縮小傾向にある。徳永製菓の強みは「豆菓子の概念に固執しない製品づくりにある」と上迫豊社長は強調する。これまでの豆菓子はおつまみや高年齢層向けの商品が大半だった。

1カ月に1つの新製品――。月2回、製造、販売の担当者6人が集まり、侃々諤々（かんかんがく）の議論を交わす。

徳永製菓が追求するのは「味、楽しさ、驚き」（上迫社長）。甘辛やしょうゆ味が定番だった豆菓子ではなくプリンやミカン味など他社にはない生地で豆を包んだ商品を販売する。豆菓子業界では、異端児だが、見方を変えれば開拓者。上迫社長は「製造業に必要なことはイノベーション。伝統を守るだけでは前進はない」と言い切る。

看板とらわれず

05年に開設した店舗は築70年の事務所を改築したもの。大分県・由布院で古民家の改装に携わったデザイナーなどの意見を取り入れた。風情のある店構えは流行に敏感な若い女性の人気を集め、豆菓子のユニークさとともに全国に広まった。

「どんな味でも商品化できる」（徳永副社長）。顧客の要望に即応できるのは製造工場が店舗に併設していることもある。豆を煎り、生地で包み味付けの作業をするのは熟練の職人技が不可欠だ。「季節や天候に合わせ、味付けは変わる。レシピは秘密」（上迫安代工場長）。

地方の中小企業が生き残るには独自の存在感を示す必要がある。徳永製菓の成長を支えるのは、「老舗」という看板にとらわれない職人魂かもしれない。

（福山支局長 佐々木聖）

☎ 広島支局 082-244-3155
福山支局 084-932-3345

インドからIT技術者

松江市、来年度から ソフト産業振興

松江市は2016年度からインドのIT技術者を受け入れ、人材育成・確保を目的に研修事業を開始する。経済交流を進めているインド南部のケララ州から11月中旬に視察団を招き、事業の詳細を協議する。IT産業の成長が顕著なインドとの技術交流を進めることで、企業立地政策の主要分野であるソフトウエア産業の振興につなげる。

松江市の松浦正敬市長が14日に記者会見し、事業概要を発表した。来年4月以降、松江市や鳥取県米子市など島根・鳥取両県にまたがる「中海・宍道湖・大山圏域市長会」が共同でインド人技術者を受け入れる。地元経済界も協力し企業の現場で実務を学んでもらう。研修期間は複数年を計画しており、初年度の受け入れ人数は今後詰める。

事前準備として11月10～14日にインド・ケララ州から政府高官、IT企業経営者、商工団体、大学教官など11人を松江などに招く。松江市と米子市のIT企業訪問や官民との意見交換会を開催する。視察団の受け入れは一般財団法人の海外産業人材育成協会が経済産業省から受託した事業を活用する。

視察中に松江市で開かれる「Rubyワールド・カンファレンス2015」にも参加する。同カンファレンスは松江市ゆかりのコンピューター言語「Ruby（ルビー）」の国際的な普及を目指し毎年開催されている。

5市長会は圏域で作成した地方版総合戦略の中に、ルビーを介したインドとのSE（システムエンジニア）人材育成・確保を盛り込んだ。研修事業が軌道に乗れば、インド人技術者の中海圏域での就労促進も検討する。

ネットバンキング強化

西京銀、フリーローン開始

西京銀行（山口県周南市）はインターネットバンキング事業を強化する。19日、使途が自由なネット専用フリーローンの取り扱いを始める。低利で、来店しなくてもネット上で申し込みから契約まで済ませられる。同日からはネット投資信託の取り扱いも開始。主要地盤の山口県の内外でネットを使い慣れた若年層の顧客獲得を進める。

フリーローンは個人の顧客を対象に貸し出す。金利は最も低い場合で年2・65%。融資金額は10万円以上、300万円以内。融資期間は6カ月以上、10年以内。申し込む際に運転免許証やパスポートなど本人確認資料を撮影したデータをネットで送る。ネット上で契約が完結するフリーローンは珍しいという。

ネット投信は投資信託の購入などができるサービスで銀行の窓口で購入

鳥取とお札 テーマに展示

日銀事務所 開設70年記念

日銀鳥取事務所は14日、開設70年を記念し、鳥取市にある宇倍神社の図柄が入った旧紙幣＝写真＝など、地元と紙幣にゆかりの品を集めた展示会を始めた。16日まで開く。旧紙幣のほか、鳥取藩の藩札のレプリカや裁断したお札のくずで作ったソファを展示している。

宇倍神社は、鳥取・因幡国一の宮として、648年（大化4年）の創建と伝えられ、武内宿禰命（たけのうちのすくねのみこと）が御祭神だ。1899年（明治32年）に全国の神社で初めて、武内宿禰命とともに社殿が5円紙幣の図柄に採用された。以後数回、旧1円や旧5円紙幣の図柄となっている。

宇倍神社の図入り紙幣など

同事務所の大山陽久所長は「地元にゆかりのある古いお札などを通じ、紙幣の歴史や日銀に興味を持ってもらえたら」と話している。

キャッシュカード即時発行

山口・もみじ・北九州銀

山口フィナンシャルグループ傘下の山口、もみじ、北九州銀行は店頭でキャッシュカードを申し

として販売している。丸薬やゼリー、飲料などに加工し、他社の健康食品

岡山県吉備中央町の現工場の近隣の土地を取得し、新工場を建設する。

5倍

ア

タンクの内容物や熟成期間などをきちんと管理しながら製造する

など先端的なIT（情報技術）の活用について共同で調査・研究すると発

近年、ITを使った金融サービスが増えており、共同研究を通じて活用を